

歴史の道

—— いにしえをたどる ——

その一

中山道碓氷峠越

なかせんどう うすいとうげこえ

中山道碓氷峠越は、上州坂本宿から信州軽井沢宿までの二里一八町（約二〇キロメートル）の区間であり、鳥居峠越とともに中山道の難所の一つであった。道は大きな落葉広葉樹の間を縫い、今もここを歩くと多くの旅人の声が風にのって聞こえてきそうな、ひっそりとしたたたずまいをしている。

（写真／剝石山の道）



妻想う歌の詠まれた峠

中山道は江戸時代の五街道の一つで、東海道とともに江戸と京都を結ぶ重要な幹線道であった。群馬県内には七宿が置かれ、碓氷峠をひかえた横川には江戸時代の三大関の一つ、碓氷関所が設けられた。

中山道碓氷峠越は、この碓氷関所を過ぎ、県内最後の宿である坂本宿から長野県の軽井沢宿までの二里一八町(約一〇キロメートル)の区間である。この峠越の道は、明治一九年(一八八六)に南側に新道(国道一八号線)が開設されたために車道からは完全に隔離され、今も往時の姿をよくとどめている。

ところで、この碓氷峠越の起源はいつ頃までさかのぼれるであろうか。碓氷坂の名は、古くは『日本書紀』や『万葉集』にもみえ、中でも日本武尊が東国平定の際、碓氷坂に達した時、妻の弟橘媛をしのんで、碓氷嶺に登り「吾嬬はや」と言ったので、その東の諸国を吾嬬と呼ぶようになったという説話は有名である。

また、古代律令制時代の官道であった東山道の碓氷越ルートの問題がある。このルートについては、従来から碓氷峠越説と南約五キロメートルにある入山峠越説の二つがあった。しかし、近年では入山峠から多量の石製模造品を出す祭祀遺跡が発見され、古代東山道の

碓氷越は入山峠とする説が有力である。

碓氷峠越の開設は、入山峠越より防衛が容易なことから、武士団成立後の古代末期以降と考えられ、峠に建つ熊野神社には正応五年(一二九二)の銘のある梵鐘があることから、遅くとも鎌倉時代にはすでに開かれていたものと思われる。

この峠越の道を舞台にして、南北朝時代の正平七年(一三五二)には、北朝方の足利尊氏と南朝方の宗良親王、新田義宗との合戦、天正一八年(一五九〇)には、小田原北条攻めの前田利家らの豊臣方と松井田城主大道寺政繁の北条方との合戦などが行われている。

中山道は江戸時代の主要街道の一つであったために、この碓氷峠越の道を北陸・信州などの参勤交代の大名、皇女利宮をはじめ將軍の夫人となるために京都から東下する姫宮、毎年日光東照宮へ派遣された例幣使などが往

中山道碓氷峠越をゆく

1 堂峰番所跡

碓氷関所の遺見番所として設けられた番所跡で、かつては番所一棟、役宅二棟があった。現在も杉林の道沿いに石垣や門扉の礎石が残る。また、道から一段高い丘陵上には、番所や役宅のあった二段の平坦面が残る。

列石山の急な坂道を登りきると眼下に坂本宿を一望できる眺めと呼ばれる場所がある。ここからの風景は、峠越えの難所の労をしばし忘れさせる、まさに絶景である。

六畳の上段の間、八畳の次の間、一〇畳の入側、八畳の納戸がある建物があったが、今は石垣だけが残っている。

4 堀切

天正一八年(一五九〇)の豊臣秀吉による小田原北条攻めに際し、北条方の松井田城主大道寺政繁がその防備のために開削した堀切跡。

3 四軒茶屋跡

列石山にあった茶屋跡で、茶屋本陣もここに置かれていた。経営者は小左衛門といひ、門を入ると

この道は馬背状の細い丘陵の上を走っており、天然の要害地である。

5 山中茶屋跡

峠越の道の中では中心的な場所として、寛文中(一六七〇年頃)には人家が一三軒あり、名物の力餅を商う茶屋がにぎわった。街道からやや北に入ったところに墓碑などの石造物が多くあるところがあるが、ここにはかつて茶屋本陣があった。経営者は丸屋大右衛門で、間取りに工夫を凝らし、上段の間に庭を挟んで左右二ヶ所に配されていた。

6 笹沢の施行所跡

江戸呉服町の与兵衛により文政一一年(一八二八)に建立された人馬の休憩施設で、間口一〇間、奥行き四間の家があった。近くには豊かな水量を有する沢があり、この峠を越える人馬にとってはまさにオアシスであった。

7 熊野神社

碓氷峠の群馬・長野両県の県境に鎮座する三社神社で、県境に本宮、群馬県側に新宮、長野県側に那智宮が建立されている。社伝では、日本武尊が東征帰路の際、道に迷い、紀伊国熊野の山中のナギの葉をくわえたヤタ鳥が案内して

来している。さらに、一三回目の江戸行きで初めて中山道を通った貝原益軒、江戸から郷里の柏原へ帰る小林一茶、公用で大阪から江戸へ戻る大田蜀山人、長崎奉行に従い長崎に向かう伊沢蘭軒など、みんなこの峠を越えている。

また、明治六年二月二六日に政府の工女募集に応じ松代を出立し富岡製糸場へ向かった一行は、二八日にこの峠を越えている。その中の一人、和田英は「思ったほど難儀ではなかった」と峠越の感想を記している。新天地での使命感に燃えていたためか、それとも名物の力餅を食したためであろうか。

道には、現在、ところどころに案内板が立てられているだけで、ほとんど整備の手が加えられていない。しかし、往時に思いをはせるにはこれで十分であり、ぜひ、一度歩かれることをおすすめしたい。

中山道碓氷峠越

〈所在地〉 群馬県碓氷郡松井田町坂本・峠、長野県北佐久郡軽井沢町峠町

〈交通〉 峠越道の入り口までは、JR信越線横川駅から中山道を徒歩でたどりながら、碓氷関所、坂本宿を経て約45分。

なお、峠越道の入り口から熊野神社までは約8キロメートル、徒歩で3時間程度。熊野神社から軽井沢までは車の通行も可能。

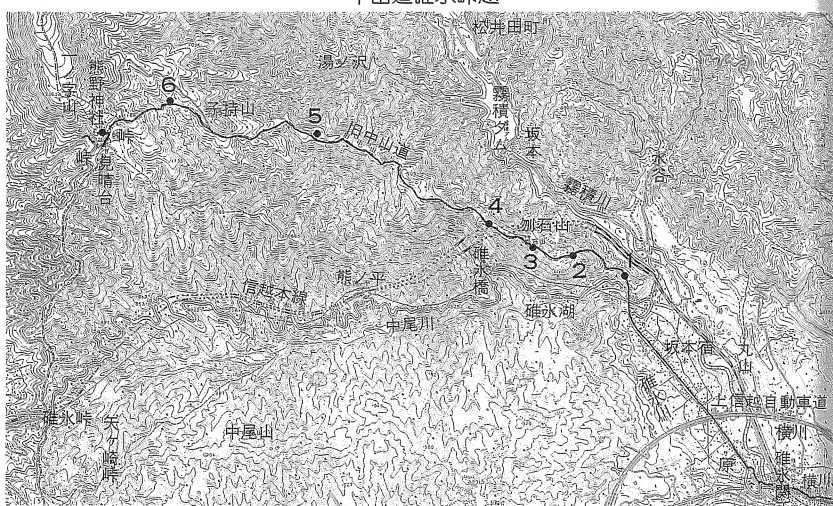
〈周辺の見どころ〉

国指定重要文化財碓氷峠鉄道施設(近代化遺産)、同名勝妙義山、県指定史跡碓氷関所跡、同横川の茶屋本陣、同五料の茶屋本陣(お東・お西)、松井田城跡、小根山森林公園、碓氷湖、軽井沢、霧積温泉



熊野神社

中山道碓氷峠越



無事峠に到着したことから、熊野神社を勧請したという。境内には、二九二 銘のある梵鐘をはじめ、松井田町・軽井沢町指定文化財な県指定重要文化財で正応五年(一二九二)の銘のある梵鐘があること、

(群馬県教育委員会文化財保護課埋蔵文化財第二係)

指導主事 三浦茂三郎

歴史の道

いにしえをたどる

その二

なかせんどうしなのじ

中山道信濃路

中山道の難所の一つである碓氷峠^{ツルギトウ}を越えようと、信濃路に入る。日本一の山並みを貫くこの道は、軽井沢宿から馬籠宿^{まろうじど}までの二六宿、およそ四五里（約一七七キロメートル）の区間であり、高原、峠、盆地、そして狭い谷あいを縫って行く。まぶしい新緑の坂を、湧き上がる雲を眼下に、時に、山河燃ゆる紅葉の山腹を、さらに厳しい積雪のなかを、旅人の足音と歴史を刻み、道は今に続いている。

（写真／笠取峠の松並木）

山並みの道

中山道は徳川家康が慶長七年（一六〇二）に制定した五街道の一つで、江戸と京都を結ぶ重要な交通路であった。江戸の板橋宿を起点に近江守山宿までの六七宿があり、近江の草津・大津で東海道と合流して、京都三条大橋までと数えるなら、六九宿となるため、「中山道六十九次」といわれた。

街道の全体路線は古代律令制時代の東山道に準じている。また、信濃国内では東山道が木曾より南の伊那谷を通っていたのを中山道では木曾谷を通ることになったため、中山道という名称は一七二六年に「中仙道」から改められ、木曾路を通るので木曾街道とも呼ばれるようになった。

なお、東山道の路線や駅の場所の詳細は不明な点が多いが、古代から千数百年にわたって、信濃国内に東海道の海側の道に対する山側の道として主要幹線道路が存在したことで、幕府による中山道の制定があったといえよう。街道の道幅はおおむね二間（約三・六メートル）、平均して二里ごとに宿場が設けられ、街道には松・杉並木、一里塚などが整備されたところで、中山道は東海道と比べて、川渡や、渡海の心配がなく、ほぼ予定の日数で旅ができる利点があった。反面、特に信濃国内では、和田峠・塩尻峠・鳥居峠・馬籠峠など

の峠を越える、起伏に富んだ山がちの道であり、雨・風といった悪天候や、寒さの厳しい冬場には旅人を苦しめた。

県内における宿は、碓氷峠を越えた軽井沢から善光寺・追分・小田井・岩村田・塩田・八幡・望月・芦田・長窪・和田・下諏訪・塩尻・洗馬・本山の一五宿と、磐川・奈良井・蕨原・宮ノ越・福島・上松・須原・野尻・三留野・妻籠・馬籠の木曾一宿の併せて二六宿が置かれ、約四五里（約一七七キロメートル）、およそ七日間の旅程であったという。これらの宿場の多くは戦国時代からの交通の要所であり、木曾一宿などは地頭・小領主の館などのそばにできた町並みであった。

甲州街道通りの高島・高遠・飯田藩以外の信州の諸大名は参勤交代に中山道を利用した。また、松尾芭蕉、与謝蕪村、司馬江漢、十返舎一九、佐久間象山や関ヶ原の戦いに向かう徳川秀忠軍、幕末の東征軍東山道鎮無総督の

中山道 信濃路をゆく

1 笠取峠の松並木
街道整備時に幕府から小諸藩に赤松数百本が下附されて、植樹されたもの。現在では全長約一キロメートルの道沿いに、二〇〇年前後を経た大木の松一〇〇本余りが並列している。近年、周辺は公園

整備されるなど、旧中山道のおもかげを今に伝えている。県天然記念物指定。

2 和田宿

中山道随一の長丁場で難関であった和田峠を控えた宿駅で、幕末に皇女和宮降嫁の宿泊地でもあった。

軍などなど、歴史を彩りながら、みなこの道を通っている。

時代が明治に入ると宿場制の廃止、鉄道の開通、幹線道路の改修や国道への編入により、街道全体に在時のおもかげを残すものが少なくなった。そのなかで、信濃路には景観を含めた伝統的文化を、住民が積極的に残して今に至った例がいくつかあり、それらを文化財として後世に残す努力がなされている。

中山道信濃路のまどろは随所にあるが、ここでは平成八年秋に文化庁により「歴史の道百選」に選定された県内の中山道のうち、「中山道—信濃路」とされた四カ所を主に触れておこう。

（注）四カ所
笠取峠（立科町）
青原（和田峠）
奈良井宿（鳥居峠）
馬籠宿（南木曾町）
馬籠宿（馬籠峠）
馬籠宿（南木曾町）
山口村

本陣の復元を契機に国史跡指定となる。宿内には旧旅館、脇本陣も復元されるなど、宿場時代のたずまいをよく残している。

3 和田峠

男女倉口から峠までは、石畳、接待茶屋、一里塚など旧道の痕跡

がよく残る。復元された永代人馬施行所は江戸の豪商かせや与兵衛が出資し、旅人の労苦を助けるために碓氷峠とともに設置されたもの。

ので、一月から三月までの間、峠を行く人たちに、粥と炭火を、牛馬には小桶一杯の飼料を施した接待所である。冬期における道中の厳しさを想像させる。国史跡指定。

4 奈良井宿

「奈良井千軒」と呼ばれ栄えた宿場で、格子、袖壁、猿頭づきの鎧、庇などを持った家々の軒の低い先が連なる町並みは訪れる人に往時をしのばせる。宿場内に残るいくつもの水場では、難所で聞かされた鳥居峠を南に控え、旅人が一服した風景が浮かぶ。なお、民俗資料館（商家中村邸）は町家建物内部を見学できる。また、宿場一帯は重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

5 鳥居峠

奈良井川（日本海側）と木曾川（太平洋側）の分水嶺で、奈良井宿から登る口は石畳の道が復元されている。峠頂きは北に奈良井宿、南に蕨原宿を眼下に見ることができ、往時をしのび、一息つけるところである。

6 妻籠宿

町並み保存の原点といわれる宿場の保存事業により、宿場の景観が再現されている。本陣が復元され、脇本陣奥谷、歴史資料館とともに南木曾町博物館が近年できた。南木曾町内へのうち、江戸時代の姿をとどめている街道部分が国史跡指定となり、宿場を中心とした周囲の景観を含めて重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

7 馬籠峠から馬籠宿

妻籠宿側から、白木改番所跡をたどりつつ峠道を抜け、頂上を登りきると、はるかに東濃平野を望む風景に突然出会うことになる。また、頂上には正岡子規の句碑があり、峠を下った先が馬籠宿となる。馬籠宿は鳥居峠から生誕の地であり、「夜明け前」の舞台として著名である。宿場内日本陣跡には藤村記念館がある。

中山道信濃路

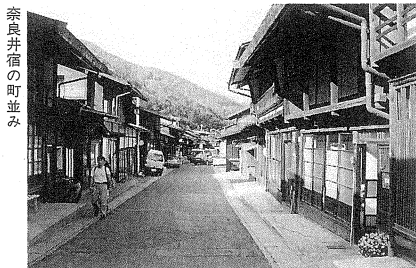
〈所在地〉

長野県北佐久郡立科町、小県郡和田村、木曾郡塩川村、岡本村、岡南木曾町、岡山口村

〈交通〉

- 笠取峠付近へはJR信越線小諸駅から白樺湖行きバスで40分、「芦田」下車、徒歩10分。関越道小諸インターから40分。
- 和田宿へはJR信越線上田駅からバスで90分（途中、丸子で乗換え）、「上和田」下車。関越道上田インターから60分。なお、男女倉口から和田峠までは約4.7キロメートル（徒歩で80分程度）。
- 奈良井宿へはJR中央西線奈良井駅下車。長野道塩尻インターから30分。宿場から鳥居峠までは約4キロメートル（徒歩100分）。
- 妻籠宿へはJR中央西線南木曾駅からバス7分、中央道中津川インターから25分。また、妻籠宿から馬籠峠までは5.3キロメートル（徒歩90分）、峠

〈中山道-信濃路〉



奈良井宿の町並み

歴史の道

——いにしえをたどる——

その三

なかせんどう ひがしみのじ

中山道 東美濃路

島崎藤村の小説に「すべて山の中である」とうたわれた
木曾路を、妻籠宿・馬籠宿とたどっていくと、道はやが
て美濃の国に入り、なだらかな平野部の中を続いていく。
中山道東美濃路は、旧美濃国南部を横断していた中山道
の東半部約四〇キロメートルをさす。石畳に紅葉舞い散
るこの季節、東美濃路は往時の面影をたどる多くのハイ
カーでにぎわう。

(写真／琵琶峠の石畳)



駱駝も逗留した宿

岐阜県南半部の旧美濃国は、古代から東国への入口の「関国」として重要視されてきた。古代の三関の一つで唯一現存が確認されている不破関（関ヶ原町）や、美濃と信濃の国境の祭祀遺跡として有名な神坂峠（中津川市・長野県阿智村）は、当時の官道であった東山道の沿線にあった著名な遺跡である。

江戸時代初期に、江戸と京都を結ぶ幹線道路として東海道に続いて開設された中山道は、ほぼ東山道を踏襲するかたちで旧美濃国を東西に横切っている。美濃国内には東は落合宿（中津川市落合）から、西は今須宿・関ヶ原町（今須）まで一六カ所の宿場が設けられた。このうち落合宿から鵜沼宿（各務原市鵜沼）までを「東美濃九宿」、加納宿（岐阜市加納）から今須宿までを「西美濃七宿」と呼び、総称して「美濃十六宿」と称した。

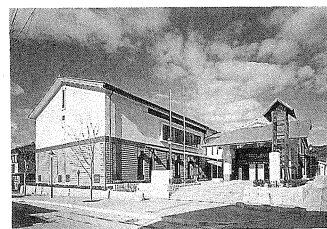
明治維新後の交通の近代化により、中山道は東西を結ぶ幹線国道や鉄道線路として利用され、往時の面影をとどめているところは少ない。しかし、御嵩宿（現在の御嵩町中心部）以東の東美濃地方（御嵩町・瑞浪市・恵那市・中津川市）では、近代の国道や鉄道が別のルートをとったため、石畳、一里塚、宿場の町

並み等の中山道の遺構と景観が良好に残っている。主なものとしては、東から、落合の石畳（中津川市）、大井宿本陣跡（恵那市）、皇女和宮や明治天皇の休憩所（恵那市ほか）、琵琶峠の石畳、南北両塚が四里連続して残る一里塚（瑞浪市）などがある。江戸時代の天保年間（1830-1844）に刊行された、深淵英泉・安藤広重の二人の絵師により描かれた「木曾街道六十九次」に見える情景を、部分的ではあるが現在もしのぶことができ、春・秋のハイキングのシーズンには観光客も多い。

沿線の宿場には、幕末の皇女和宮の降嫁や水戸藩天狗党の志士たちの上洛など、当時の幹線道路にふさわしい豊富な史料も残されている。その中でも目を引くのは、駱駝の中山道通過であろう。伏見宿（御嵩町伏見）に残

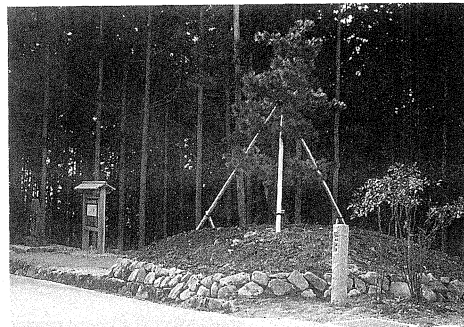
中山道東美濃路をゆく

- 1 新茶屋の一里塚（中津川市）
美濃（岐阜）・信濃（長野）国境脇に北・南塚とも現存。「是より北木曾路」の碑あり。
- 2 落合の石畳（中津川市）
落合宿から国境にかけて江戸時代の石畳が現在も残る。延長約八四〇メートル。岐阜県指定史跡。
- 3 落合宿本陣（中津川市）
加賀藩から火事見舞いで贈らる江戸時代以来の老松（岐阜県指定天然記念物）などが残っており、往時をしのべる。
- 4 大井宿本陣跡（恵那市）
宿内に六カ所の升形が今も残る。門及び周辺の塀が往時のままだに残る。岐阜県指定史跡。
- 5 大井宿本陣跡（恵那市）
平安時代の歌人、西行ゆかりの地の伝説が残る。
- 6 西行塚（恵那市）
瑞浪市内の一里塚（瑞浪市）
- 7 瑞浪市内の一里塚（瑞浪市）
四里にわたって一里塚が北・南両塚とも良好に残っている全国的にも珍しい例。岐阜県指定史跡。
- 8 琵琶峠の一里塚（瑞浪市）
峠を挟んで約一キロメートルにわたって往時の石畳が残る。岐阜県指定史跡。
- 9 大久手宿（瑞浪市）
江戸から四七番目の宿場。現在も脇本陣をはじめとする旧家や大田蜀山人の「壬戌紀行」にも見える史料によれば、文政七年（一八二四）六月にオランダ人により將軍家に献上された一つの駱駝が中山道を通って江戸へ向かったことが記されている。この時は三日間伏見宿に逗留したようで、見物人が初日は一、四〇〇人、二日目は八〇〇人に及んだことが記録されている。またその際には見物料をとったようであり、「ふ意（不意）之錢もうけ有之候」と史料にあるのは今と変わらぬたくましい商魂を見るようでほほえましい。（『御嵩町史通史編』上巻より）



中山道みだけ館

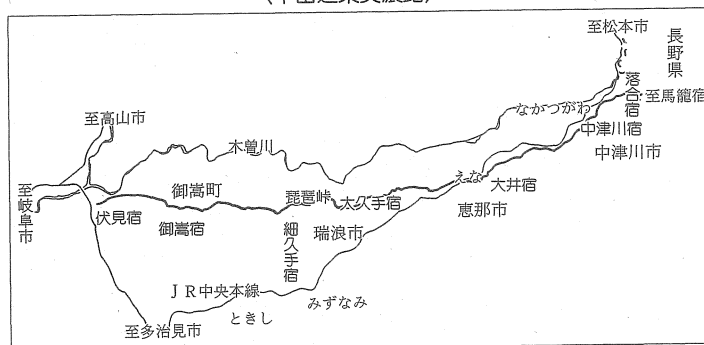
新茶屋の一里塚



中山道東美濃路

〈所在地〉 岐阜県中津川市・恵那市・瑞浪市・御嵩町
 〈交通〉 J/R東海中央本線中津川・恵那・武並・釜戸・瑞浪市各駅または名古屋鉄道御嵩駅よりバス
 ないしは徒歩。
 〈周辺のみどころ〉 全国最小の城持ち大名遠山氏の居城苗木城跡（国指定史跡）、恵那峡、全国でも珍しい石の博物館・博石館、瑞浪市化石博物館、国指定名勝・天然記念物鬼岩、国指定名勝日本ライン

〈中山道東美濃路〉



る江戸時代以来の老松（岐阜県指定天然記念物）などが残っており、往時をしのべる。

が、尾張藩の定本陣であった建物が現在も旅館として営業している。中山道みだけ館（御嵩町）郷土資料館・図書館の複合施設として、御嵩宿の町並みの一角に平成八年に建設された。



落合宿本陣

歴史の道

いにしえをたどる

その四

国頭・中頭方西海道

くにかみ・なかがみほうすいかいどう

国頭・中頭方西海道は、那覇市首里を起点に最先端の国頭村及び沖縄本島北部周辺離島へ至る道をさす。この区間の道筋は、山あり川あり、海浜地ありて、他の街道に比べてきわめて変化に富み、また道筋にかかわる悲恋物語や山賊等のエピソードも多く残っている。首里王府時代に重要な道として位置づけられた街道で、第二尚氏の尚敬王の代には大がかりな北部巡検が行われている。現在、西海道の大部分が国道五八号と重なっている。

写真／恩納村・山田城麓の石畳道

琉球王府へ続く道

道は洋の東西を問わず、古くから人々の往来やさまざまな文物の交流の舞台を演出し、地域文化の発展や宗教的・政治的・軍事的に重要な役割を担ってきた。

南西諸島における公道（王道）の整備は、三山を統一した尚巴志に端を発し、第一尚氏時代（一四七〇～一八七九年）に那覇から周辺の離島に至る海の公道に及ぶことになったといわれる。

公道の起点となったのは首里城で、一六四六年（尚賢六）の『正保三年琉球国絵図帳（写）』には、首里と各間切（今の市町村にあたる）をつなぐ五本の宿道が延び、第一に周辺の島々や両先島への道、第二に嶋尻方西海道、第三に嶋尻方東海道、第四に国頭・中頭方西海道、第五に国頭・中頭方東海道の各道が存在した。これらの道は、一般の交通のためだけでなく、軍事的にも不可欠な道であった。

首里城から浦添城への道は、第二尚氏七代王尚寧による琉球国の国道の土木工事によって、全長約二キロメートルすべて石畳道でつくられた。この工事の詳細については、一五九七年に建立された「浦添城の前の碑」に和文、漢文で陰刻されている。

浦添城から牧港橋までの道は、一九二三年頃に郡道（現在の県道一五三号線）としてつ

くられた道の東北数メートルを通っていた。牧港橋から嘉手納の比謝橋への道は、北方へほぼまっすぐに延びていて、北部の人々が首里城へ行くときの宿道であった。比謝橋は、一六七七年に木橋を補修し、一七一七年に石橋に造り替えられた。

比謝橋から恩納間切への道は、道幅も広く三メートル以上もあり、沿道にはリュウキュウマツが植えられ、盛夏には道行く人々に涼を与えた。しかしこの道も戦後幅員を増幅したり、路面がアスファルトに改変されて、昔の面影は失われている。

恩納間切から名護間切への海岸線は風光明媚なところとして知られ、一九七二年の日本復帰に伴い沖縄海岸国定公園に指定されている。

国頭・中頭方西海道をゆく

1、浦添城跡

浦添城跡は、仲間から牧港に延びる石灰岩丘陵の東の端に築かれ、城は一四世紀から一七世紀まで使われた。北側の崖の中腹には「浦添ようどれ」と称する英祖王陵と尚寧王陵がある。国指定史跡。

2、座喜味城跡

読谷村座喜味集落北の標高二一五メートルの丘にある。一五世紀初期に、護佐丸が築いたと伝え



比屋根坂の石畳道（恩納村）

られる。城は一の郭と二の郭からなり、いずれも琉球石灰岩で造られたアーチ門（拱門）が一つずつある。国指定史跡。

3、仲泊遺跡

恩納村仲泊集落西方の琉球石灰岩丘陵の東側崖下に形成された遺跡群である。史跡内には、四つの貝塚と近世の石畳道がある。別名比屋根坂石畳道とも呼ばれる近世の石畳道は、幅一・五～三メートル、長さ一七四メートルが確認されている。国指定史跡。

4、万座毛

恩納集落北西に位置した隆起サンゴ礁の上のほぼ平坦を呼ぶ。名前は、一八世紀前半、当時の琉球国王尚敬が国頭地方を巡視して

の途中この地に立ち寄り、「万人を座らせるに足る」の意で命名したと伝えられる。県指定名勝。

5、名護のひんぶんガジユマル

旧名護市役所から西へ約一五〇メートルの道路中央にあるがじゅまるの太木で、樹齢はおよそ二五〇年と推定される。木の高さは約一七メートルで直径は約三メートルもある。名前は、根元に建てられた地元で「ヒンブンシー」と呼ばれる「三府龍脈碑」に由来する。国指定天然記念物。

約3.5kmの距離を歩く村教育委員会主催による「歴史ロードを歩こう」（恩納村）



国頭・中頭方西海道

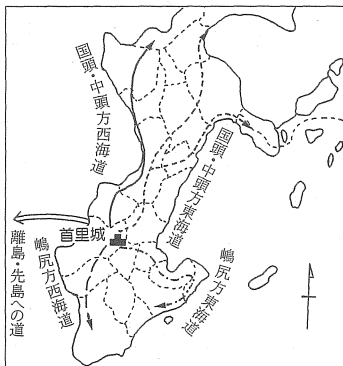
〈所在地〉

沖縄県那覇市、浦添市、宜野湾市、北谷町、嘉手納町、読谷村、恩納市、名護市、本部町、今帰仁村、大宜味村、東村、国頭村、伊江村、伊是名村、伊平屋村

〈交通〉

浦添市へは那覇からバスで20分。宜野湾市、北谷町、嘉手納町方面へは那覇からバスで40分。読谷村、恩納村方面へは那覇からバスで60分。名護へは那覇からバスで2時間。本部町、今帰仁村方面へは名護からバスで35分。大宜味村、東村、国頭村方面へは名護からバスで50分。伊江村へは本部町の港から船で30分。伊是名村、伊平屋村へは今帰仁村の運天港から船で90分。

「宿道」基本ルート概略図



当山の石畳道（浦添市）



歴史の道

—— いにしえをたどる ——

その五

くまのすんけいどういせど

熊野参詣道伊勢路

熊野参詣道伊勢路は、伊勢本街道の田丸の追分から熊野三山に至る四〇里（約一六〇キロメートル）の間で、二大聖地の伊勢神宮と熊野三山とを結び、おかげまいりや西国三十三カ所霊場めぐりの道として発達した祈りの道であった。熊野の大自然の中に溶け込んでいる苔むした石畳や、路傍にたたずむ巡礼者たちの墓碑は、往時の旅人たちの息遣いを今に伝える。

（写真）馬越峠の石畳道

信仰の道

この道は、伊勢神宮と熊野三山とを結ぶ唯一の幹線道で、紀伊半島東部の山間部を南北に縦走する東回りの道として古くから利用されたが、道筋には八鬼山越え、馬越峠をはじめ一三の峠が立ちはだかり、巡礼者たちを大いに苦しめた道でもある。

熊野信仰の歴史は古く、奥深い山々、滝、巨岩、木々など、大自然の中に宿る神々の姿を見いだしたのがおそらくその始まりであろう。やがて、熊野は現世を超越した異境の地との意識が高まり、奈良から平安時代にかけての仏教思想の浸透と相まって、本宮（熊野坐神社）、新宮（熊野速玉神社）、熊野那智神社のいわゆる熊野三山の結束は深まり、本宮は阿弥陀如来に、新宮は薬師如来に、那智神社は観音菩薩に充てられ、神仏習合をこく自然に成立させる過程で熊野信仰の基盤が確立されていったものと思われる。

また、平安時代末期以降、末法思想の流行を反映した皇族・貴族の相次ぐ熊野御幸・熊野詣が、さらに熊野信仰に拍車をかけることとなった。後白河上皇の撰に成ると伝えられる歌謡集『梁塵秘抄』に、「熊野へ参るには紀路と伊勢路とどれ近し、广大慈悲の道なれば、紀路も伊勢路も遠からず」とあるように、この頃、紀路とともに峻険苦難の伊勢路も一

本の長路線として開発整備されていたことが知られる。

中世においては、関東や東北からの武士層や僧侶を中心とする参詣者が増え、伊勢参宮に続いて熊野街道（伊勢路）をとり、熊野を起点とする西国三十三カ所巡礼へと向かうことが盛行した。これには、平安時代中期以降、布教と熊野三山への誘致活動を積極的に進めてきた「御師」（祈禱師と宿主を兼ねる）や「先達」（修験者と道中案内を兼ねる）の活躍があった。

元和五年（一六一九）、徳川頼宣が初代紀州藩主となると、藩政改革の一環として街道整備も図られ、和歌山から新宮までの紀伊路に、田丸までの伊勢路を加え、一環した「熊野往還道」の整備が行われた。これに伴い、幕府

の五街道に準じて宿駅や伝馬所（三八カ所）の設定、一里塚の築造も徐々に行われたが、宿駅は問屋場・本陣等を備えたものではなく、巡検使や藩主の巡行には、富豪や村役人の家が臨時の本陣として利用された。一方、熊野街道は、おかげまいりという爆発的な伊勢参宮とも相まって、さらに西国巡礼の旅へと向かう庶民の道として大いに賑わい、文化元年（一八〇四）には、二万三、〇〇〇人の巡礼者が通ったと『熊野年代記』は伝える。

現在、熊野参詣道は国道四二号線と重複する部分も多いが、山間部の峠道も随所に残っている。特に「歴史の道百選」に選定された八鬼山道、馬越峠道は美しい石畳をはじめ、一里塚、町石、茶屋跡、巡礼墓碑なども残り、多くのハイカーで賑わっている。

熊野参詣道伊勢路をゆく

1、原の石仏庵跡（多気町）

往時を偲ぶことができる。県史跡指定。

3、ツツラト峠

（大内山村・紀伊長島町）かつて伊勢国と紀伊国の分かれ目であった峠。江戸初期に紀州藩により荷坂峠越えルートが開発されるまでは、この峠越えの道がとられていた。峠からは、浄土へと続く熊野の海を初めて望むことが

でき、いよいよ熊野をめざすんだという期待を抱く地点である。

4、馬越峠（海山町・尾鷲市）

海山町側の登り口から峠までの約二キロメートルの坂道は端正な石畳道がよく残る。時には江戸末期の俳人・可涼園桃乙の句碑が建ち、「西国三十三所名所図説」によれば句碑の北隣に岩船地蔵堂、向

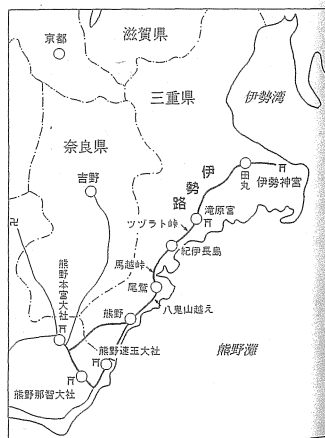
〈周辺の見どころ〉

県史跡田丸城跡、原の町並み、多気町郷土資料館、柳原観音、旧舟木橋（国登録有形文化財）、滝原宮、大内山の一里塚、大昌寺格子絵天井、種まき権兵衛の里、海山町郷土資料館、真興寺はまぐり石、馬越峠の一里塚、土井竹林、慶光院清順上人の供養碑、県史跡八鬼山の一里塚、県有形民俗文化財八鬼山町石及び石造三宝荒神立像・石造不動明像、三三荒神堂、さくらの森エリア、名柄の一里塚、菅根弾正五輪塔、北の関所跡、南の関所跡、猪垣、県天然記念物飛鳥神社樹叢、徐福の宮、国天然記念物及び名勝鬼ヶ城・附獅子岩、花の庭、県名勝及び天然記念物櫛ヶ崎、熊野市歴史民俗資料館、鯨の供養塔、県天然記念物市木のイブキ、引作の大ワス、緑橋（近代化遺産）、七里御浜松原遊歩道、志原川原の巡礼供養碑、ウミガメ公園、神内神社樹叢、国史跡赤木城跡及び田平子峠刑場跡、丸山千枚田、鉱山資料館、楊枝葉師堂、国特別名勝及び天然記念物静八丁

かに茶屋があった。石積の基部しか残っていないが馬越の一里塚や桜地蔵付近の水場跡で一息つける。馬越の一里塚及び熊野街道馬越峠道は県史跡指定。

5、八鬼山越え（尾鷲市）

いくつもの峠を越える熊野街道の中でも一番の難所といわれた八鬼山。海拔六二七メートルの険阻さに加え、かつては山賊や狼が出没して旅人を震え上がらせたという。ゴツゴツとした石畳の傍らには町石を兼ねた石仏や行き倒れになった巡礼者の墓碑がたずむ。十五町石のある場所がかつての麓



茶屋跡、駕籠立場であり、山頂近くにある三三荒神堂の横にも茶屋があった。また、正徳二年（一七一）築造とされる一里塚が桜茶屋（市史跡指定）として残る。

6、八鬼山町石（尾鷲市）

八鬼山登り口の矢浜から山頂までの五〇町に地蔵の形をした町石が置かれたが、現存するのは三四处である。町石の寄進者は伊勢神宮の御師や豪商であり、平安から室町時代にかけて当地が伊勢神宮の神領であったことを示す貴重な資料となっている。

7、花の庭（熊野市）

熊野街道最後の松本峠を越え、七里御浜の海岸線に沿って平坦な浜街道を南下したところにある高さ七〇メートルの巨岩。『日本書



八鬼山峠の町石

熊野参詣道伊勢路

〈所在地〉

三重県度会郡玉城町、多気郡多気町、度会郡大宮町、同大内山村、北牟婁郡紀伊長島町、同海山町、尾鷲市、熊野市、南牟婁郡御浜町、同紀宝町、同紀和町、同鷺殿村

〈交通〉

- 田丸の迫分へは、JR参宮線田丸駅から徒歩5分。なお、玉城町から大内山村までは旧道の面影を残すところが少ないので車で移動しつつ、要所を訪ねたい。
- ツツラト峠へは、JR紀勢本線櫛ヶ谷駅下車、峠の登り口まで約4km。峠を越えて紀伊長島町の志古バス停に至るウォークコースは約6km、4時間。
- 馬越峠へは、JR尾鷲駅で下車し徒歩で北上するか、路線バス（尾鷲長島線）を使い、海山町鷺毛バス停（登り口）まで移動して南下する。鷺毛バス停からJR尾鷲駅まで約5km、4時間。車なら鷺毛バス停手前の「道の駅・海山」を利用。
- 八鬼山越えは、JR尾鷲駅で下車、あるいは路線バス（松本線）で向井バス停下車、歩いて10分で峠道に至る。向井バス停～峠～JR三木駅まで約11km、6時間。
- 松本峠から花の庭に至るには、JR大泊駅で下車、国道42号線を南下して、鬼ヶ城トンネルの手前を山手へ。JR大泊駅～峠～JR有井駅まで約4.5km、3時間。

紀』にイザナミノミコトの陵墓として登場する花の庭である。毎年春と秋に行われるお綱かけ神事（県無形民俗文化財）は有名。

歴史の道

いにしえをたどる

その六

くまのさんけいじく

熊野参詣道紀路

「蟻の熊野詣」で知られる熊野参詣道紀伊路・中辺路は、滅罪と救済を保証する熊野権現の加護を願い、紀伊半島の南部のクマ(隈)の地、コモリ(隠)の地に鎮座する熊野三山、すなわち熊野本宮大社(古くは熊野坐神社)、熊野速玉大社(熊野速玉神社)、熊野那智大社(熊野夫須美神社)へ参拝する平安時代に拓かれた参詣道である。熊野古道とも呼ばれ、熊野三山を訪れるハイカーは、今も絶えることはない。

(写真) 那智山大門坂の杉並木

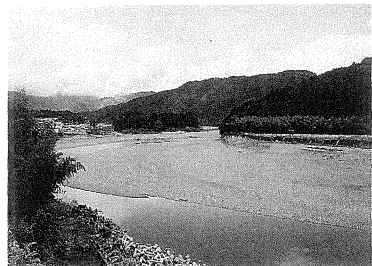
「祈りの道」熊野参詣道

熊野三山への人々の巡礼は平安時代の半ば以降、都の貴顕を中心にした山岳信仰や神仏習合、浄土信仰の広がりや盛んとなり、熊野の神は全国に勧請された。中世には武家階級が、近世になると伊勢参拝や西国三十三ヶ所巡礼をかねての熊野参詣が広く庶民階層にも行われ、多くの茶屋や一里塚も設置された。

熊野三山への参詣道には紀路と伊勢路があった。平安時代末期の後白河法皇の撰という『梁塵秘抄』巻二には「熊野へ参るには紀路と伊勢路とどれ近し どれ遠し広大慈悲の道なれば 紀路も伊勢路も遠からず」とある。紀路をたどるには、都の下鳥羽より船に乗り淀川を下り摂津・渡辺の津へ上陸した。その後、紀伊国風土記に「手束弓トハ、紀伊国ノ雄山ノセキ守ノ持弓云々」とある和泉・紀伊国境の雄の山峠を越え紀伊国に入った。紀伊における参詣道のうち雄の山峠（和歌山市）から熊野の入り口にあたる牟婁（紀伊半島南部の古称）の出立王子（田辺市）までを紀伊路、出立王子から熊野本宮大社（東牟婁郡本宮町）までを中辺路と呼び、院政期において最も利用され、後白河上皇三三回前後を最高に、かなりの頻度で参詣を重ねている。当時の参詣の様子は藤原為房の『為房卿

記』藤原宗忠の『中右記』藤原定家の『後鳥羽院熊野御幸記』をはじめとする多くの貴族や僧侶の日記、記録に詳細に綴られている。貴顕のみならず庶民また病苦の旅行者も多かったと記され、おおよそ京からの往復一カ月の旅行だったようである。そうした利用につれて、参詣道の整備も進み、紀路の最大の特徴となった熊野九十九王子社が成立した。熊野九十九王子社は熊野権現の神子を御分霊として祀った社などともいわれ、『後鳥羽院熊野御幸記』建仁元年（一一二〇）の記載から、平安時代末期には参詣道沿いに九十九王子が成立したものと考えられている。撰津・

渡辺の津には第一王子社として窪津王子社が祀られ、これより九十九王子社の巡拝を重ね、最後に破戸王子の参拝を終え熊野本宮大社に参詣したのである。



大斎原遺望

熊野参詣道紀路をゆく

1. 紀伊路

雄の山峠を越えたあと、紀ノ川を渡り南下し藤代若一王子（海南市）に着く。ここより藤代峠などの山並みを横断し、時には千里の浜などの海岸線に出ながら牟婁の出立王子に至る。

紀伊路にはこのほか、有田・日高郡境界の石畳が美しい鹿ヶ瀬峠を避けて、有田川南岸の山塊の峠に位置する糸我王子（有田市）近くの海岸から海路で比井王子（日高郡日高町）へ詣でたあと再び熊野参詣道へ合流するコースなどが

2. 中辺路

あつたようだ。

出立王子からはほぼ東方へ進路をとり富田川沿いに渡る。熊野古道館が建つ富田川の川岸に祀られた滝尻王子（西牟婁郡中辺路町）からは、いよいよ難行苦行・艱難辛苦が待ち受ける奥深い紀伊の山々を越える。牛馬童子像などが祀られた峠や幽谷をいくつも縦横断し、これより熊野の聖域に入るという発心門王子（東牟婁郡本宮町）に至る。さらに山道を進めば、遙か山並みの向こうに本宮熊野坐

熊野三山を参詣したことになる。

なつていった。

新宮・那智への参詣は、中辺路をとらず紀伊半島南部の海岸線を陸路または海路で南下し、半島最南端の潮岬からは海岸線を北上するコースがある。これらの参詣道が大辺路と呼ばれている。

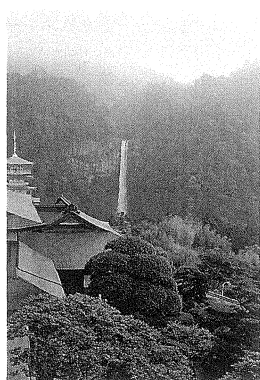
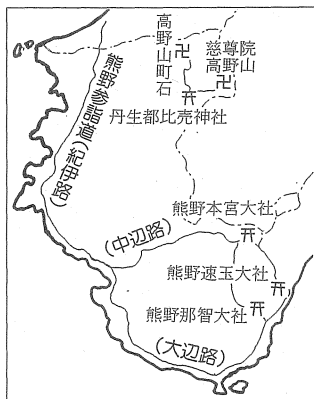
熊野三山からの帰路は、那智から再び本宮に戻ることが一般的と

線あるいはこれと並行するJR紀勢線を利用すれば便利。JRでも熊野参詣道（熊野古道）を歩くイベントを行っている。

中辺路を経由して本宮へはJR紀勢線紀伊田辺駅から国道311号線沿いにJRバスがある。また本宮から新宮までも国道168号をJRバスが運行している。

〈ボランティアガイド〉

紀州語り部として和歌山県観光ガイド専門員制度が県下に広く設置されており、熊野参詣関連を専門とする語り部が、海南市商工振興課（0734-82-4111）・下津町観光協会（0734-82-4212）・有田市商工観光課（0737-83-1111）・印南町観光協会（0738-42-0120）・田辺市経済課（0739-22-5300）・中辺路町観光協会（0739-64-1470）・本宮町観光協会（07354-2-0735）・熊野川那智勝浦町観光課（07355-2-0555）におかれている。このほか、熊野参詣道が所在するほとんどの市町村に歴史、文化財専門の語り部がおかれている。



那智大滝遺望



熊野速玉大社

熊野参詣道紀路

〈所在地〉

- 紀伊路／和歌山市 海南市 海草郡下津町 有田市 有田郡湯浅町・広川町 日高郡日高町・印南町・南部町 御坊市 田辺市
- 中辺路／田辺市 西牟婁郡上富田町・大塔村・中辺路町 東牟婁郡本宮町
- 大辺路／田辺市 西牟婁郡白浜町・日置川町・すさみ町・串本町 東牟婁郡古座町・古座川町・太地町・那智勝浦町 新宮市
- 大雲取・小雲取越え／東牟婁郡那智勝浦町・熊野川町・本宮町
- 大日越え／東牟婁郡本宮町

〈交通〉

紀伊路・大辺路へは紀伊半島の海岸線を走る国道42号

歴史の道

いにしえをたどる

その七

奥州街道

蓑ヶ坂、長坂・高山越

江戸日本橋から北上を続けた奥州街道（道中）は、釜沢（二戸市）の先で小沢を渡り、青森県に入る。蓑ヶ坂から国道まで一・五キロメートル、坂の上部の道は良好だ。任務を終えた旧街道が持つ雰囲気は、歴史の道百選にふさわしい。長坂・高山越は一五キロメートル、南部氏の城館と文化財の見学、坂また坂、一里塚を数えて進む旧道の旅が体験できる。歴史の道の調査は地域の関心呼び起こし、道筋の施設も整備された。六月二十八日には、「歩き・み・ふれる歴史の道」ブロック大会も開催される。歴史の道百選の旅を味わってほしい。

（写真／長坂を上る奥州街道）

奥州街道北辺の整備と変容

「そこのはま」は青森湾岸を指す地名であり、和歌にも古くから詠まれてきた。古代から中世に移行するころ、奥州街道（道中）の前身、外の浜（外ヶ浜）への道筋には、平泉文化の影響があったと思われる。『吾妻鏡』には藤原清衡が、白河から外の浜までの道筋一町ごとに、笠卒都婆を造立したという記述がある。

奥州藤原氏が滅亡すると、この道筋には鎌倉武士団が往来した。南部光行が糠部（ぬかのべ）に入り、平良ヶ崎城（三戸郡南部町）を構えたのは、鎌倉時代前期のことと伝えられている。武士の時代になると、馬が重要視されるようになった。宇治川の合戦で知られる名馬生駿は七戸の産、磨墨は三戸の産と伝えられている。また法光寺（三戸郡名川町）や横松院跡（三戸郡南部町）には、北条時頼の廻国伝説があるが、いずれにしても鎌倉時代の奥州街道の実態とその歴史は、偏東風の濃い霧に包まれており、伝承と推論の域を脱していない。

建武の新政のころになると史料も増え、板碑や笠石塔婆などの分布から、行き交う人の姿が多少わかってくる。根城（八戸市）や七戸城（七戸町）などで南部師行ら南朝方武将の活動が展開された。室町時代も後半になると、糠部の三十三観音巡礼が始まった。また

広大な牧場で育った馬も、この道を通って新しい主人のもとに送られていった。

江戸時代には、外ヶ浜への道筋は「奥州街道（道中）」と呼ばれ、江戸日本橋―白河間は幕府が支配するが、その先は各藩が管理した。慶長九年（一六〇四）、東奥の駅路に一里塚を築くよう、幕府は命じている。盛岡藩は三戸・浅水・五戸・七戸を経て野辺地に達するこの道を「大道筋」に格付けし、街道の直線化や並木の植栽に力を入れた。弘前藩でも同様に青森から先の油川・三厩間の道筋は「磯辺路」「浜道」に格付けされていたが、江戸から三厩までが奥州街道となるためにはさらに歳月が必要だった。奥州街道を利用して参勤交代をした大名は多いが、全区间を通ったのは松前氏だけであり、当初は野辺地に上陸して江戸に向かうことが多かった。

松前（福山）から津軽半島の平館に上陸

体験！ 歴史の道百選

養ヶ坂・長坂・高山越を歩く

それは歴史の道に選定された区間を南から歩くことにしたい。

(1) 養ヶ坂と龍立場（三戸町）
釜沢（二戸市）を過ぎ小沢を渡ると養ヶ坂の急斜面が待ち受ける。

(2) 龍立場の一里塚（三戸町）
坂の上部に龍立場があり、ここから馬淵川の眺めは雄大で、旅の疲れを忘れさせる。明治天皇御巡幸の記念碑が二基並ぶ。養ヶ坂の通行は十分な準備が必要。

(3) 三戸市街と三戸城（三戸町）
旧街道は一時、国道四号線と合

するが、間もなく東側を直進し、畑の中を通過して三戸の町並みに出る。ここには追分石があったが、現在は三戸城跡の城山公園に移されている。三戸城は近世初頭、南部信直の居城だった。馬淵川と熊原川の合流点を利用し、比高九〇メートルの高地に構築された山城だ。現在には公園となり、歴史民俗資料館や糠部神社、追分石などがあり、春の桜が美しい。三戸の町並みを歩くと、城下町としての特色を所々に見いだすことができる。

(4) 聖壽寺館界隈（南部町）
旧街道は狼辺川を渡り左折する。橋のたもとに奥州街道の碑があり、その先の小向の集落を過ぎると、聖壽寺館跡（本三戸城）の堀底道に入る。この館跡は

三戸南部氏の拠点で、主郭や大堀などの遺構がある。城域にある三光寺には南部信直夫婦墓所、県史跡、南部利直霊屋（県重宝）、南部利康霊屋（重要文化財）などがある。現在、聖壽寺館跡は発掘調査が進められている。

(5) 長坂・高山越（南部町・五戸町）
近世の奥州街道は聖壽寺館跡から北に進み、陸羽街道に合流するが、やがて東に入り宮沢村跡から長坂道にかかる。長坂の途中には一里塚が二組残るが、一方は造り替えによる残存と考えられる。長坂の上部には高山の龍立場があり、明治天皇の記念碑と展望台がある。浅水に近づくと、浅水の「一里塚」が二組、片側だけ残っている。浅水は宿駅で、陸羽街道と再会する。

(6) 浅水から五戸へ（五戸町）
地蔵坂を上ると休憩施設の十峰庵がある。十海塚を右下に見て、鞍越坂を越え馬内清水でのを潤し、馬内坂に挑む。上部には惣林橋の一里塚が一對二基残存する。明治天皇の記念碑を過ぎると、人里が近づいてくる。ちなみに道幅は三・六メートル、二間幅である。宮沢村への分岐点には、昭和天皇の御大典記念碑があり、追分石を兼ねている。

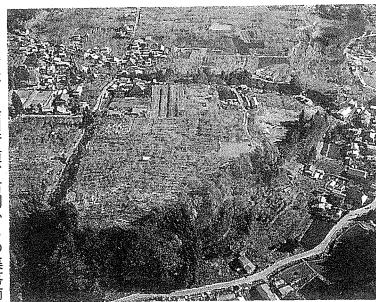
(7) 坂の町五戸
奥州街道はひより坂から五戸町に入るコースと、専念寺・高誓寺の門前を通り町の中心部に入る道筋がある。町内には江渡家住宅（重要文化財）や復元された代官所、文化施設を配置した歴史みらいパークがある。

奥州街道

――養ヶ坂・長坂・高山越――

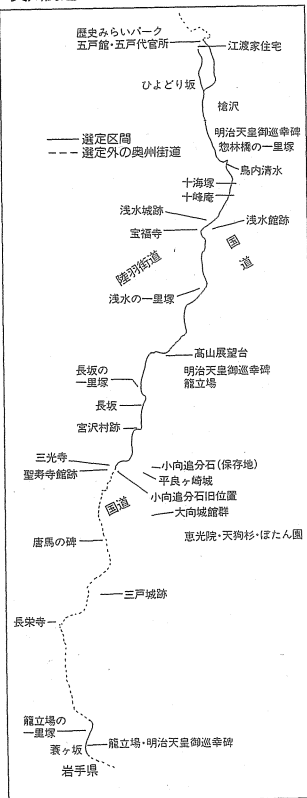
〈所在地〉

青森県三戸郡三戸町・南部町・五戸町



聖壽寺館跡と奥州街道、右側からの集落南が南部町小向字村中、横に続く木々の列が江戸時代の奥州街道。

奥州街道―養ヶ坂・長坂・高山越―



歴史の道

いにしえをたどる

その八

羽州街道

矢立峠越

羽州街道は、奥州街道の桑折から分岐し、山形諸藩領を抜け、院内杉峠を越えて久保田藩領に入る道である。

天和元年（一六八一）の『領中太小道程』（秋田県公文書館所蔵）という記録によると、杉峠から久保田城下・大館城下を経て津軽藩領境の矢立峠に至る久保田藩内の羽州街道は、六三里四町二三間の道程であるとされている。

（写真）萩長森山麓を北へ向かう羽州街道、芝谷地西側付近

大館城下の羽州街道

大館城は、幕府の一國一城令による城破却をまぬがれ、南部・津軽両境をおさえる久保田藩領北域の鎮護として幕末まで続した。その支配地は、佐竹一族で初代の大館城代である小場義成が、藩主佐竹義宣より「小繁より上は勝手たるべし」と、米代川中流域の狭隘地、小繁から以東上流域の比内(古代からの米代川中流域の呼称)地方支配を五千石格で認められ、三代義房の代に「佐竹」を名乗ることを許され、以後、「佐竹西家」と呼ばれるようになった。

大館城支配地を通る羽州街道は、米代川沿いに東進し、そのルートの大抵は現国道七号線に受け継がれている。小繁から鷹巣盆地北縁を東進し、米代川狭隘地の早口地内、長坂(坂地)出口(早口)赤沼(岩瀬)の米代川北岸の集落を経て大館盆地に入る。

宝暦九年(一七五九)の『小繁村より矢立峠まで街道村々丁場間数橋小橋共書留帳』(大館市史第二巻、以下『宝暦記録』と略記)という記録がある。幕府巡見使通行に際して、街道の維持や普請にかかわる記録と考えられ、道路や沢川に架ける橋、田水に架ける小橋を周辺各村に割り当てている。藩の財政を圧迫し、割り当てられた村や村人に大きな負担となっていたことがうかがえる。

この『宝暦記録』に沿いながら、大館城下から矢立峠までの羽州街道を少し細やかにたどって見てみよう。

羽州街道をゆく

岩瀬集落には、元禄年間に伊勢から移住し長慶金山をはじめ多くの鉱山経営を手がけ、運輸・商業で巨万の富を得、豪商の名をほしいままにした松坂屋・伊多波武助の屋敷跡がある。宝暦記録には「武助手舟に而御用」と記されている。また、岩瀬からは米代川を渡って二井田(属田)十二所として南部領鹿角へ通じる脇街道である「鹿角街道」が分岐していて、「宝暦記録」には「十二所街道」と記されている。

岩瀬からさらに東進して山田川を越えると、中世文書に「山田河口」村と記されている川口集落に入る。「宝暦記録」には「家数五拾貳軒 御宿屋五軒 相見得候」とある。

川口から立花集落、長木川を徒歩渡り餅田集落を経て、広大な片山野の真ん中を東にまっすぐ突っ切り片山集落に至り、そこから南に折れ御坂を通り大館町の西端町人町の鎮守である大館神社前

に至る。神明

社前から東に向かい城下の足軽町(現常磐木町)に入る

が、神明社前には南西方

へ向かう別の道がある。この道を進み歩

行坂を下ると米代川端の船場集落に至る。明治

三二年に奥羽本線が敷設されるまで、船場は米代川舟運での物資輸送における大館の玄関口であった。足軽町から城下町に入った羽州

街道は五〇〇mほど東進し、北に折れ鍛冶町(大町)田町へ、田町北端から東に折れて川原町(独結町)通町そして長木川へと、町人

町である外町だけを通り、武家町である内町には入ることなく城下を抜ける。大館城と内町は街道東

側の高台にあつて街道からは見ることができない縄張りがなされて

り街道あしく龍成候」とみえる。やがて板子石集落山神社前を通

過、乱川東岸に沿って進み釈迦内神明社前で乱川を渡り釈迦内集落に入る。ここには北条時頼の廻国

伝説が伝わり、街道脇の実相寺境内にある初七日山釈迦堂に安置さ

れている釈迦像は、時頼が廻国の際に奉納したものと伝えられ、釈

迦内の地名もこの伝承によっている。「宝暦記録」では釈迦内について「家数百拾軒 御宿屋六軒」と記している。

釈迦内を過ぎると街道は、矢立峠から南流する下内川に沿い北上する。国指定天然記念物「芝谷地

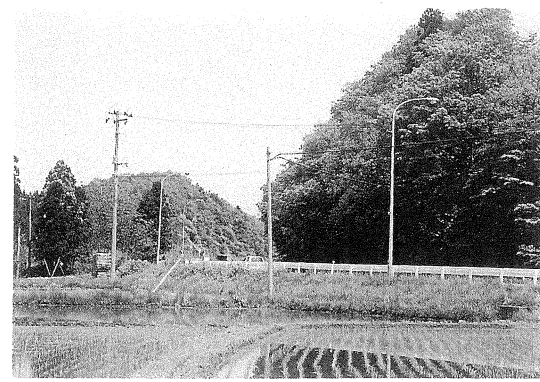
湿原植物群落」の西側を通るが、「宝暦記録」には「柴谷地より出水有」とある。橋桁集落の北端には

下内川を挟んで南岸に岩坂山が、北岸に筑紫森が

屹立し、下内川を歩行渡りしな

ければ先へは進めない。南部脱藩浪人相馬大

作が津軽公の行列を襲おうとしたのが、この難所を眼前にする岩



橋桁集落北方：岩坂山(右手)と筑紫森(左奥)間の羽州街道(現国道7号線)

羽州街道——矢立峠越——

〈所在地〉 秋田県大館市下川沿・大館・釈迦内・矢立地区
 〈交通〉 JR奥羽本線下川沿駅・大館駅・白沢駅・陣場駅
 〈周辺の観光地・文化財〉

国指定天然記念物比内鶏・声良鶏、秋田県指定天然記念物金八鶏(通称秋田三鶏)保存会/国指定天然記念物秋田犬保存会博物館/国指定重要文化財大館八幡神社神殿二棟/国指定天然記念物芝谷地湿原植物群落/国指定天然記念物長走風穴高山植物群落/秋田県指定史跡矢立廃寺跡/秋田県指定書跡菅江真澄著作(大館市立中央図書館)/大館郷土博物館/大館樹洞ドーム(木造構築ドーム世界一を誇る)/大館温泉郷(大館市内各所に入浴休憩温泉施設

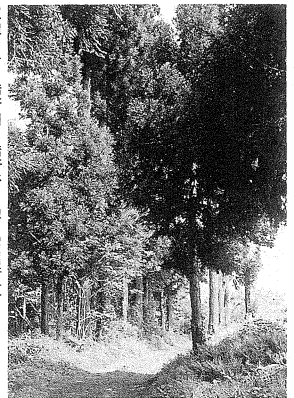
がある)/矢立温泉郷(矢立峠周辺に、日景温泉・矢立温泉・矢立ハイツの宿泊温泉施設がある)
 〈ガイド〉
 1時間1,000円で観光案内人制度あり。ただし、希望日の1週間前までに大館市観光協会(☎0186-42-4360)へ申し込むこと。

- 古川古松軒『東遊雜記』天明8年(1788)
- 高山彦九郎『北行日記』寛政2年(1790)
- 人見蕉雨『秋の田草』寛政9年(1797)
- 船遊亭船橋『奥のしおり』天保13~14年(1843~44)
- 吉田松陰『東北遊日記』嘉永5年(1852)
- イサベラ・バード『日本奥地紀行』明治11年(1878)

■羽州街道について記した書籍(近世期を中心に)



津軽領境矢立杉付近の半腸の小径



釈迦内から橋桁間・橋桁野を通る羽州街道

が、この難所を眼前にする岩

が、この難所を眼前にする岩

が、この難所を眼前にする岩

が、この難所を眼前にする岩

が、この難所を眼前にする岩

が、この難所を眼前にする岩

が、この難所を眼前にする岩

が、この難所を眼前にする岩

が、この難所を眼前にする岩

が、この難所を眼前にする岩

が、この難所を眼前にする岩

が、この難所を眼前にする岩

が、この難所を眼前にする岩

が、この難所を眼前にする岩

が、この難所を眼前にする岩

が、この難所を眼前にする岩

が、この難所を眼前にする岩

が、この難所を眼前にする岩

が、この難所を眼前にする岩

が、この難所を眼前にする岩

が、この難所を眼前にする岩

が、この難所を眼前にする岩

歴史の道

いにしえをたどる

その九

しだわいぞうあまきこえ

下田街道

天城越え

東海道から分かれて、伊豆を縦断する下田街道は、三島大社の大鳥居（三島市）を出発点として南に下り、天城峠を越え下田に至る道である。下田街道で最も難所と言われる天城峠は、多くの人々が往来してきている。その中には松平定信やハリスなど歴史に登場する人物も含まれている。歴史につつまれたこの道を楽しんでもらえれば幸いである。

（写真／旧天城トンネル・河津側より）

文化庁月報 1998.9 26

歴史の道

——いにしえをたどる——

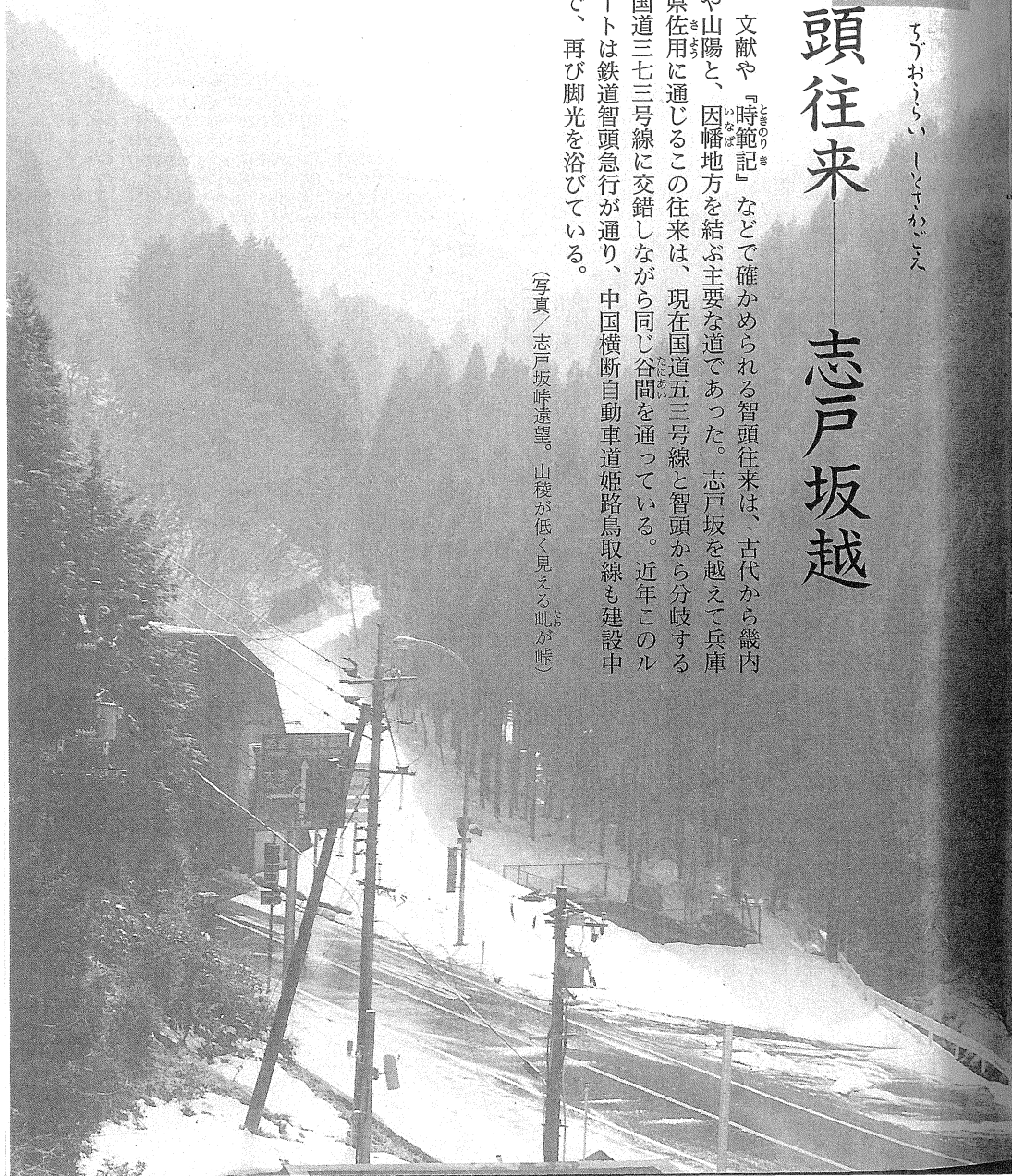
その十

ちうおうらいーんとすかいこえ

智頭往来 志戸坂越

文献や『時範記』などで確かめられる智頭往来は、古代から畿内や山陽と、因幡地方を結ぶ主要な道であった。志戸坂を越えて兵庫県佐用に通じるこの往来は、現在国道五三号線と智頭から分岐する国道三七三号線に交錯しながら同じ谷間を通っている。近年このルートは鉄道智頭急行が通り、中国横断自動車道姫路鳥取線も建設中で、再び脚光を浴びている。

(写真) 志戸坂峠遠望。山稜が低く見える此が峠

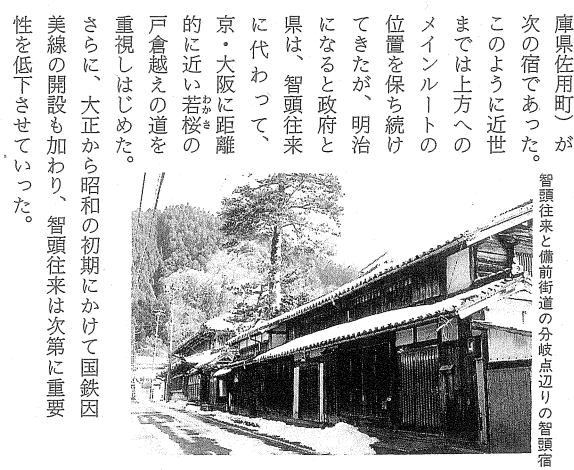


因幡国司が赴任した道

『播磨国風土記』は、伯耆の加具瀬と因幡の邑由湖の二人が大いに驕り、節度がないのを知った仁徳天皇が、狹井連佐夜を使わして二人を召しだすその途中、佐夜が彼等を水中に漬けたところが「美加都岐原」という説話を伝えている。美加都岐原は現在の兵庫県佐用郡三日月と比定されていて、古代から因幡地方と大和方面へのルートであったことがうかがえる。

『日本後紀』では、大同三年（八〇八）六月二十一日条に「因幡国八上郡莫男駅と智頭郡の道保駅の駅馬を各々二匹削減した」と記録されている。奈良時代には日本海沿岸側の山陰道が正式な交通路であったが、平安時代の日記・紀行文を見ると、山陰地方と都との往反は陰陽山越えの道と、山陽道の組合わせがほとんどであり、山陰道はあまり利用されなかったと推測される。したがって、近世の智頭往来にあたる道は、奈良・平安時代においても因幡と京を結ぶメインルートであり続けたであろう。さて、平安時代の承徳三年（一〇九二）二月にこのルートを通り、志戸坂峠を越えて、因幡国司として赴任した人物に平時範がいる。彼は任国の因幡に赴き、三月まで因幡国府に滞在している。その頃の日記が残されていて『時範記』と呼ばれる。それに

よると、二月九日に京を出発した時範は、山陽道を経て一四日に美作国境根（西栗倉村坂根）に到着した。翌早朝雨雪（雲）のなかを出發し、卯刻（午前六時頃）に鹿跡御坂（志戸坂峠）で「境迎え」の儀式を行い国入りしている。近世になって鳥取藩は江戸幕府に倣い、寛永九年（一六三二）に宿駅を定め、伝馬を備えて智頭往来を重要視した。それは智頭往来が上方への主街道であっただけではなく、この道が参勤交代の道であったからである。初代藩主池田光仲が、慶安元年（一六四八）に最初の正式な入国以来、二代藩主池田慶徳の文久二年（一八六二）までの二四十年間に一七八回往復している。参勤交代は智頭往来を二日で駆けつけた。鳥取を出発し、千代川に沿って通り智頭宿で一泊、翌日駒嶋・志戸坂峠を越え、小原（大原）経由で平福（兵庫



智頭往来と備前街道の分岐点近りの智頭宿

智頭往来——志戸坂越をゆく

鳥取市から国道五三号線を南に三〇kmの用瀬町と智頭町との境は、山峡の険しい地形で「篠ヶホキ」と呼ばれる。明治一六年前には山腹を廻る危険な道が智頭往来であった。トンネル入口脇の道端に、宝暦五年（一七五五）十一月の銘がある二体の石地蔵が祀られている。ここから智頭

往來の古道は姿を見せる。歴史の道目選に選定された智頭往來はこれより始まり、御立山（藩領）の中腹のホキ道を巡って市瀬集落の茶屋土居に降り、千代川沿いに上流をめざして遡る。

宿場であった智頭の町中を通って本谷（山形・山郷地区）を上り、最奥の村・駒嶋を過ぎると志戸坂

の峠道である。篠ヶホキの起点から志戸坂峠まで約二〇km、峠の頂上から下って岡山県西栗倉村坂根まで約一km、歴史の道の選定区間は全長二kmである。

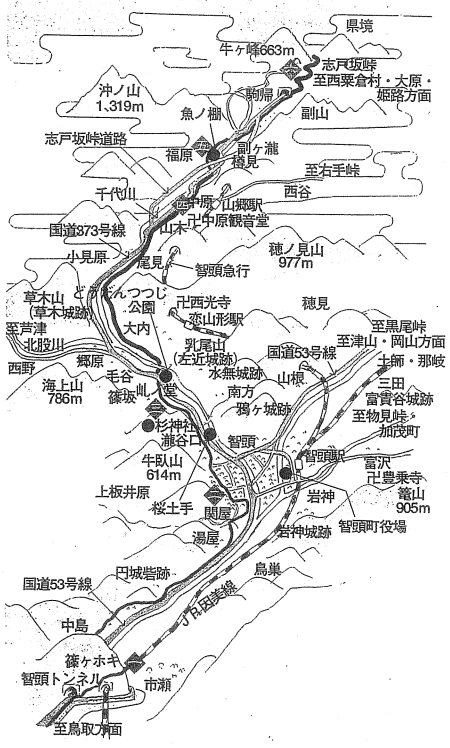
だが、二km全部が往來の古道ではなく、国道や町道に併合され形を変えた部分も多い。それでも次の六ヶ所は昔ながらの古道が残っており、往來の面影を偲ぶことができる。

歴史の道「智頭往來」の起点、ホキ道の安全を祈った篠ヶホキの石地蔵

《ボランティアガイド》
 ○智頭町観光女性ボランティア
 連絡先：朝音……（歴史の道は研修中）
 鳥取県八頭郡智頭町大字智頭1820
 喫茶樹里（代表者／岡岡干春） ☎0858-75-0080
 ○智頭町文化財保護審議会
 智頭町教育委員会生涯学習課 ☎0858-75-3113

智頭往來——志戸坂越

《所在地》 鳥取県八頭郡智頭町大字市瀬から大字駒嶋と岡山県英田郡西栗倉村坂根までの間
 《交通案内》 智頭宿の町並みまではJR因美線智頭駅、智頭急行智頭駅から0.5km、篠ヶホキまで4km、篠坂から毛谷までは2、3km。中原岡ノ鼻五輪塔、観音堂までは智頭急行山郷駅から0.1～0.2km、魚ノ棚から副ヶ瀧までは2、3km、志戸坂峠まで5km。坂根までは智頭急行あわくら温泉駅から2km、志戸坂峠まで3km。
 《周辺にある文化財・観光地》 国宝絹本彩色普賢菩薩像他重文の仏像を有する豊乗寺（新見）／県指定天然記念物豊乗寺の大杉1～3号／登録有形文化財「石谷家」（智頭宿内）／国定公園「氷ノ山・後山・那岐山」のうち芦津溪・八河谷杉ノ木村／あわくら温泉（岡山県西栗倉村）



- (1) 篠ヶホキ市瀬
享保六年（一七二一）の「因幡上京海道記」はここを「甚難所東海道処々難所トイエトモ、カカル危険ナ処ナシ」と語っている。
- (2) 関屋・智頭宿
関屋は戦国時代の番所跡、智頭宿の町並みは往時の景観を伝えている。
- (3) 篠坂周辺タワン堂
集落上の山裾に古道が残り、地藏などが往來の歴史を伝える。
- (4) 中原岡ノ鼻五輪塔・観音堂
柿の大木の下に宝篋印塔が並び、古い歴史と郷愁を誘う風景がある。
- (5) 樽見・魚ノ棚・副ヶ瀧
俗に「魚ノ棚」と呼び、「海道記」は「此処二絶景アリ」と賞賛する渓流がある。また、副ヶ瀧は因幡の名所の一つと伝えられ、古歌も残る。
- (6) 駒嶋・志戸坂峠・坂根
この六ヶ所はそれぞれの特徴があり、周辺の風景が見どころである。わけでも志戸坂峠道は圧巻だ。杉・檜林の立木の中の坂道を延々と約二・五km、標高五八五mの峠頂上の風景もすばらしい。訪れた歴史研究者は「歴史も古くすばらしい峠だ」と賞賛する。散策

歴史の道

いにしえをたどる

その十一

ゆすはらわいどう

檜原街道

坂本龍馬脱藩の道

文久二年（一八六二）春、幕末の風雲急を告げる時局を洞察し、自らの使命を自覚した高知の郷土・坂本龍馬は、決然として土佐を脱藩した。新しい時代の到来を夢見て、二八歳の青年武士龍馬がひた走りに走った道、檜原街道をたずねてみよう。

（写真／榎ヶ峠付近の道）

坂本龍馬脱藩の道

坂本龍馬は天保六年（一八三

五）、高知城下の郷土、坂本八平・幸の二男として生まれた。「泣き虫、はななれ、よばあ（寝小便）たれ」と呼ばれる虚弱な少年であったが、母の没後、男勝りの姉、乙女の薫陶を受け、たくましく変身し、土佐では並ぶ者のない剣豪に成長した。

一九歳のとき、江戸は千葉定吉の門で剣の修業をする龍馬は、浦賀でペリーの四隻の黒船を見て、新しい時代の息吹と外国のアジア支配の脅威を実感する。

そして武市瑞山が率いる土佐勤王党に血盟加入、藩政の改革を図るが、因循固陋な藩の体質に失望し、決然として土佐を脱藩した。文久二年（一八六二）三月、龍馬二十八歳の春であった。

三月二十四日に、同志の沢村惣之丞（のちの変名、関雄之助）とともに高知を発った龍馬は、西に向かい現在の伊野町・日高村・佐川町を通り、幡蛇森の朽木峠を越え、葉山村・東津野村を経て、二五日の夜、橋原町太郎川の那須俊平・信吾父子の家に宿泊した。翌二六日早朝、那須父子の道案内で四万川の宮野々関を破り、正午頃、国境の大野ヶ原は峠ヶ峠を越えて脱藩した。道案内の一人、那須信吾は、ここから橋原へ引き返している。

伊予路に入った龍馬らは、大洲藩領の小屋村（現在は愛媛県野村町）から榎ヶ峠を越えて、横通り・封事ヶ峠・三杯谷・日除・水ヶ峠（いずれも河辺村）を通り、泉ヶ峠に着き脱藩後の第一夜を過ごした。

二七日、北表村を経て宿間村（いずれも五十崎町）に着いた。道案内の那須俊平は、ここから橋原へ引き返している。

龍馬と惣之丞は宿間から川舟に乗り、小田川・脇川を下り、正午頃、大洲町（大洲市）に着いた。ここで昼食をとり、さらに舟で下り、夕方、長浜村（長浜町）の富屋金兵衛方（現在の富田運夫氏方）へ宿泊、翌日長浜港を出港して、長州へと向かった。

それから先五年間、龍馬の獅子奮迅の働きにより明治維新は成るが、その革命前後、慶応三年（一八六七）十一月二五日、龍馬は盟友の中岡慎太郎とともに、京都の近江屋に倒



封事ヶ峠付近

橋原街道——龍馬脱藩の道をゆく

(1) 「歴史の道」に

選ばれた橋原街道
龍馬脱藩の道のうち、高知県橋原町から愛媛県五十崎町までの約五〇kmの道は、文化庁から「歴史の道」に選ばれた。
道は関保町村によって保存整備が行われ、標識等も設置されている。

(2) 橋原から国境まで
部分的にはアスファルトで舗装された道を歩いているが、大部分は龍馬が通った頃の街道のままに保存されているのがうれしい。我々も龍馬になつて、自らの使命と日本の将来を考えながら、橋原街道を歩いてみよう。

龍馬が脱藩前夜を過ごした橋原町太郎川的那須邸はなく、わずかに屋敷跡が残っている。町の高台に「維新の門」と名付けられた八志士群像があり、大きな決意を胸に、西の空を見つめて立つ龍馬の旅姿がある。
道は四万川の宮野々関跡を越え、

■龍馬脱藩の道に関する問い合わせ先
高知県橋原町教育委員会生涯学習課
☎0889-65-1111
愛媛県河辺村役場総務課
☎0893-39-2111



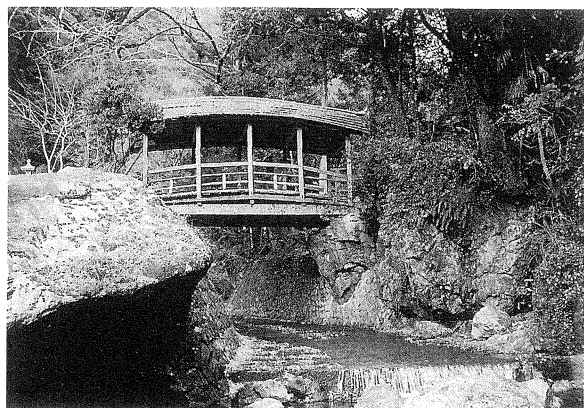
宿間舟着場

橋原街道

橋原 5.2K 80分 → 宮野々関跡 4.5K 70分 → 六丁 2.5K 40分 → 茶屋谷
6.0K 150分 → 榎ヶ峠 2.0K 30分 → 大師堂下 5.5K 100分 → 榎ヶ峠登り
4.0K 60分 → 神納(御幸の橋) 4.2K 90分 → 封事ヶ峠 2.0K 30分 →
三杯谷の滝 2.2K 60分 → 水ヶ峠 2.8K 50分 → 泉ヶ峠 2.6K 50分 → 石
上峠 2.4K 40分 → 白岩の大清水 2.0K 30分 → 宿間



国木付近



屋根のある橋として知られる県民俗文化財「御幸の橋」

龍王神社で知られる茶屋谷から山道となる。松ヶ峠番所跡を通り、標高九七〇mの国境、榎ヶ峠までの六kmの道は、脱藩道中での最大の難所である。
大野ヶ原の榎ヶ峠の頂上には、現在大規模林道が通り、昔の面影を失っているのが残念である。
(3) 伊予路を泉ヶ峠まで
榎ヶ峠を越えたと下り道となり、野村町小屋に着く。脱藩した龍馬が飲んだという伝説の湧き水「男水」でのを潤し、道は上り坂となり榎ヶ峠に向かう。

峠を越えたと河辺村に入る。国木を経て神納を通るとき、屋根のある橋を渡る。「マディソン郡の橋」ブーム以来にわかに有名になった県民俗文化財「御幸の橋」の上で、龍馬もふと足を止めたであろうか。
道はまた上り坂となり、横通りから封事ヶ峠を越える。峠を下ると、三杯谷の滝を横目に日除・水ヶ峠を経て、泉ヶ峠に至る。
(4) 泉ヶ峠から宿間まで
かつて宿場としてにぎわった泉

ヶ峠は、わずかに石垣と井戸の跡が残っている。脱藩後の第一夜、龍馬は姉譲りの刀を胸に抱き、この峠でどんな夢を見たことであろうか。
そして道は、五十崎町の北表から小田川沿いの宿間に着く。川舟に乗る龍馬と惣之丞。土手の上から見送る俊平。三人の胸に去来したものは何であつたろうか。

歴史の道

いにしえをたどる

その十二

大口筋 白銀坂

おおぐちすていしらかねざか

大口筋は東目筋ともいい、鹿兒島城下から熊本・宮崎へ向かう江戸時代の重要な街道であった。大口筋上の難所として知られた白銀坂は、古代の薩摩と大隅の国境に位置し、その急峻な峠道は多くの旅人を悩ませてきた。現在約半里の道のりに昔ながらの石畳が残り、歴史を体感できる古道として、自然観察や眺望を楽しむ人々に活用されている。

(写真)一九九七年度に整備を終えた白銀坂の石畳

戦国武将が陣を構えたいにしえの道

鹿兒島と大口を結ぶ大口筋は、現在の市町村でいうと、鹿兒島市・吉田町・始良町・加治木町・溝辺町・横川町・栗野町・菱刈町・大口市を通っている。江戸時代における鹿兒島藩の主要な街道の一つであり、藩政上の連絡網及び物資の輸送路として利用されてきた。この沿線がすべて島津氏によって領域化されていたことが特に重要であろう。それでは、大口筋が成立したのはいつ頃であらうか。しばらく戦国時代からその実情を見てみよう。戦国時代初期においては、この地域は名目上は守護島津氏の領国であったが、安定した支配ではなく、一族が反乱を起したり、有力な領主が独立した動きを見せていた。

大永年間（一五二一〜二八）には、分家である薩州家の島津実久と伊作相州家の島津忠良の勢力が、守護家であった島津勝久の勢力を圧倒するようになり、勝久は島津忠良の子貴久へ家督を譲った。その後の合戦で貴久は勝久を破り、天文一九年（一五五〇）新しく鹿兒島に築城した内城へ入城した。これによって、守護島津氏は戦国大名島津氏に成長したといわれ、本格的な領国経営に乗り出していく。

鹿兒島内城の北方は薩摩・大隅境に接して

おり、思川と別府川の流域は有力国衆の蒲生氏の所領であった。天文二三年（一五五四）九月、島津貴久は蒲生氏を攻略するため、白銀坂に陣を張り、蒲生方の支城岩剣城を攻撃した。この戦いで貴久の弟である忠将は初めて鉄砲を使用している。また、のちに戦国武将として名をせざる島津義弘はここで初陣を飾っている。岩剣城攻略後は、帖佐本城・松坂城・北村城を激戦の末落城させ、ついに弘治三年（一五五七）四月、蒲生氏は蒲生本城を放棄した。この戦いによって、加治木を含む大口筋の鹿兒島灣地域は、一気に戦国島津氏の領域となった。

このうち、永禄五年（一五六二）に横川・栗野を領有化し、同一二年（一五六九）に肥後の相良と結んだ菱刈隆秋と講和して、大口地頭に新納忠元を命じた。以上のように大口筋の成立は、永禄二年以後のことと考えられる。

なお、大口筋上にあつて白銀坂と向かい合う加治木の龍門司坂（県指定史跡）は、江戸時代の元文六年（一七四一）に石量敷となった記録が残っている。

近世の鹿兒島を代表する戯作文学『大石兵六夢物語』にも主人公兵六が活躍する舞台として白銀坂が登場し、人々にとつてこの坂が身近なものであつたことがうかがえる。

大口筋 白銀坂をゆく

1、風格のある石量
白銀坂では、急傾斜地のみに石量が敷かれており、坂を登り切った平坦地には石はなく、今では珍しくなった土の道が優しく迎えてくれる。石量にも工夫が施されており、傾斜が急なところは階段状となつて勾配を解消している。また、石が移動しないように段差部分の石にはやや深めの石が用いられている。

石量の両脇には側溝はなく、道幅は平均約三m、石量の幅は約一・四〜二・四mである。これらの石は上流の河原石や斜面に埋まっている山の石を使用している。所々、大振りな石を使った風格ある石量が残っており、参勤交代の行列や商人の行き来する様子を彷彿させてくれる。

2、「景状絶勝なり」と讃えられた眺め
鹿兒島市内にある県立歴史資料センター黎明館は、鹿兒島（鶴丸）城の本丸跡にあり、大口筋の起点である。ここを出発して吉野・吉田を越え、薩摩・大隅境の白銀坂である。途中鬱蒼とした杉木立ちや楠林を抜けると、布引の滝の轟きが聞こえてくる。すると眼前の視界が開け、秀麗な霧島連山

の山並みと穏やかな錦江湾の眺望が飛び込んでくる。

江戸末期の鹿兒島の地誌書『三國名勝図会』では、「景状絶勝なり」と絶賛している。昔の旅人もこの景色に感嘆し、しばしば疲れを癒したであろう。

3、白銀坂登山を採り入れた郷土教育
鹿兒島では昔から「山坂道者」という青少年を鍛練する行事があった。現在では健康づくりや持久力を養成するため、郷土教育に採り入れられている。毎年、坂の上にある鹿兒島市立少年自然の家や県立青少年研修センターでは、定期のプログラムとして「白銀坂登

山」を試み、多くの児童・生徒がこの坂を往復している。また、高校生登山部門の県代表を決定するコースとしても活用されている。白銀坂は、四季の移ろいとともにその表情を変えていく。春霞の中に点在する山桜は、幽玄な雰囲気を感じ出し、新緑に満ちた橋は生命力にあふれている。歴史を追体験する場だけではなく、自然と親しむ場としても白銀坂は近年貴重な存在となりつつある。

現在、石量の保存修復作業が年次的に進みつつあるが、朝夕の散歩に利用する人、遠足の子どもたち、行楽シーズンにグループで訪れる人など日々利用者が増えつつある。始良町では、今後も歴史を体験できる文化財として「大口筋白銀坂」の保存と活用を図っていく。

※この連載は今年のをもちまして終了します。

大口筋 白銀坂

《所在地》
鹿兒島県始良郡始良町脇元
《交通案内》
JR日豊本線重富駅下車、歴史国道・白銀坂駐車場まで徒歩5分。大口筋白銀坂登山口まで徒歩10分。
《周辺の文化財・観光地など》
○御石山（おいしやま）
島津歳久は、兄義久・義弘とともに活躍した戦国武将である。文禄元年（1592）、歳久は豊臣秀吉の怒りを受け、宮之城への帰路、電ヶ水の心岳寺の地で自害し果てた。この地の井戸水で歳久の首は清められ、後に石塔が建てられた。
○布引の滝



白銀坂中腹、楠林をぬける

第2展望所での説明風景

